

「随順」が肝要となる。依他に随順して初めて円成実＝悟りに至る経路＝「穴」が開く（pp.324-325）。

ここで先程「穴」と述べた間隙に漂うのが阿頼耶識と呼ばれる下意識の流れ。それは如来への覚醒の種子を蓄えた蔵（如来蔵）だが、章炳麟はこれを私有物ではなく、（因陀羅網の上に蜃集する？）衆生が汎く共有する、集合的な共有財（潜在意識）へと再解釈する。

悟りが成就した見地から観ずれば、「円成実自性」が即ち真如たる法界だが、それはもとより言語的叡智の臨界の彼方に存する。ここで井上哲次郎に戻るならば、「真如実相」は「難言說相、難名字相」ゆえ「不可思議」であり表象不可能。思えばそれを空海は「請来目錄」で平易にこう言い換えていた。「法は本より言なけれど、言にあらざれば頭れず。真如は色を絶すれども、色を待ってすなはち悟る」と（『空海』p.418）。

ここに、現象界（「色」）を超えた無分節なる真如の「実在」と、それを無明の衆生が伺い知る方便たる「真言」との表裏（「円融相即」 einheitlicher Realismus）、そして衆生の道程を照らす法燈が、その姿を現わす。

一方で郭馳洋は井上哲次郎から章炳麟への思想の「熏習」を跡づける。他方、安藤礼二は言語表現の臨界に肉薄して、空海の真言密教思想形成の究極をその領に見届ける。千年余を跨ぐ時空を越えて照らし合う思想——その一端が紡ぐ因陀羅網の纏綿は、世界哲学への展望を与えている。

＊郭馳洋『思想としての批評——明治期東アジア哲学における展開』（東京大学出版会、2025）。安藤礼二『空海』（講談社、2025）。

乗り越えようとする姿勢も、容易く透視されよう。井上の周辺で確立された語彙で謂う「哲学」と「宗教」との間隙を跨ぐため、井上は両者のうえに充填すべき「穴」を穿ち、これを「実在」と定義した。郭馳洋は周到にもそう解釈する（p.244）。評者ならば、この「穴」に「現象」＝有限と「実在」＝無限とを跨ぐ「空」∅たる不在の〈場〉を想定したい。ここで「現象」界の「我」Atmanと「実在」界の「梵」Brahmanとの「梵我」の関係が問題となる。

『ウパニシャッド』に知られるTat tvam asi（p.266）はショーペンハウアーの『意志と表象の世界』にも登場する。「汝はそれ」即ち夙に「梵我一如」と漢訳された常套句だが、それはインドからイスラームへと伝播し、その変容を井筒俊彦が精緻に分析している。この大我／小我論は儒教の「修身齊家治國平天下」とも融合し、日本でも明治期以来、国家論として独自の展開を見せる。だが、注目すべきは近代日本で咀嚼された古今東西の思想が、梁啟超から章炳麟らの日本亡命清人思想家たちに伝播して闊した、比較哲学的展開だろう。

譚嗣同は康德すなわちカントの「自由之真我」と「不自由之現象我」とを、仏典の「真如」と「無明」の差異に重ねる（p.290）。さらに章炳麟はスピノザの汎神論を華嚴教学で謂う「帝網」すなわち因陀羅網の喩えに重ねる（p.320）。万物が牽引し合い相発相映する「帝網」の裡に「真如」が顕現する。だが章炳麟は「覺」（靈的覚醒）への執着が、かえって迷妄を産む危険を警告する。もとより覺性を離れば、不覺もない。だが「依他」なくして無明からは脱し得ない。そのため

空海・井上哲次郎・章炳麟 東アジアを全球哲学に拓く

大乘起信論を軸に

稲賀繁美

国際日本文化研究センター／
総合研究大学院大学・名誉教授

『図書新聞』3710号
2025年11月8日
4面

井上哲次郎といえど「教育勅語」執筆者のひとりであり、戦前の右翼国粋の復古主義者として批判に晒されてきた。東京帝国大学で多くの弟子を哲学者として輩出したお雇い外国人のラファエル・フォン・ケーベルは井上について「悪い人ではない、stupidなだけだ」と述べたとの伝説が残る。だが郭馳洋『思想としての批評』を安藤礼二『空海』と併せて読むと、井上の知的射程が、改めて再認識され、その思弁が近代東アジアに生々流転しつつ横溢する様に圧倒される。

昨今、「世界哲学」への志向が顕著となった。空海から井上哲次郎さらには章炳麟に至る系譜からは、欧亜の東西に螺旋を描く思想と信仰との要路を刳抉した先覚の姿、その思索の生態が躍動する。

井上哲次郎は「現象則実在」を掲げ、「現象は差別なれど、実在は無差別」と説く（1897）。現象とは知性による分析の対象であり、言語による分節により理解されるが、「実在」はそうした概念把握begreifenを超える。前者が形而下に対して後者が形而上の領域を占める。両者は表裏一体、「円融相即」 einheitlicher Realismusと見る井上は、明らかに華嚴教学を下敷きにカント以下の泰西批判哲学を東洋側から再解釈している。井上はさらに、老子は実在を「無名」、現象を「有名」と見たと敷衍する。名付け得ぬ実体がRealityに相当する（pp.216-219）。

だが物自体Ding an sich（「物如」）への接近不可能性を説いたカント「境界概念」Grenzbegriffに対して、井上は「離〈言説〉相、難〈名字〉相」を引き、言と名の彼方に「真如」の実相を見る。仏典に親しんだ読者ならば、井上が『大乘起信論』を下敷きにカントを